

近代勝山の繊維歴史 年表

昔

明治時代
1868年～

明治9年
勝山製糸会社
設立

明治29年
勝山町大火

明治37年
たばこが
専売制へ

明治44年
勝山機業兄弟
合資会社創立

第一次
世界大戦

大正2年
合資会社松文
機業場創立

大戦景気
戦後恐慌
大正8年
羽二重の
輸出好景気

世界恐慌
昭和恐慌

昭和9年
人絹繊維業が
好景気

第二次

世界大戦
アジア
太平洋戦争
昭和16年
私立勝山精華
女学校開校

昭和29年
勝山市発足

高度成長期

昭和30年
集団就職開始

石油危機
(オイルショック)

平成21年
はたや記念館
ゆめおーれ勝山
オープン

今

令和時代
2018年～

大火・不況・戦争：
幾多の困難を乗り越え勝山を支えてきた

「これまで」の繊維業

製糸業・たばこ産業から繊維業へ

江戸時代終わりごろから明治時代の初めにかけて、勝山の代表的な産業は生糸をつくる製糸業やたばこ製造業でした。この製糸業が勝山の繊維産地としての始まりです。ところが、大火や政府の政策（たばこの専売制）により、これらの産業が成り立たなくなってしまう。そのような困難な時に着目したのが、輸出用の絹織物「羽二重」でした。



実際に使われていた力織機
(ゆめおーれ勝山で展示)

羽二重はその当時、海外で売れ筋の織物であったため、盛んに輸出されていました。福井県でも、その製織技術が福井市を中心に嶺北地方一帯に広がり、日本最大の羽二重産地となっていました。勝山の製糸業・たばこ製造業者は、この羽二重を織る繊維業への転換をはかっていたのです。

な羽二重を織ることができる機械式の動力織機などをいち早く導入し、県内有数の産地として発展していきます。その後も、戦争や不況といった困難に見舞われますが、その度に、人絹（レーヨン）や化学繊維などの新しい繊維に転換をはかりながら発展を続けていきました。

勝山を支えた繊維業

繊維業で発展する勝山の町には、大規模な機業場やそこで働く人たちの寄宿舎が立ち並び、女学校も創設されました。繊維業は、経済、教育、文化など様々な面で勝山に影響を与え、支えてきました。



ゆめおーれ勝山 織田学芸員

もっと詳しく
知りたいときは

繊維の歴史は「ものがたり かつやまの歴史」や「はたやブックレット」で分かりやすく学ぶことができます。また、明治に建設された機業場を保存・活用した「ゆめおーれ勝山」でも当時の様子を知ることができます。気軽に遊びに来てください。

継承・発展・創造する

「これから」の繊維業

現在の勝山市には、明治の絹織物から始まった勝山の伝統や技術を継承・発展、そして新たに創造する繊維会社が多くあります。

繊維会社といっても、繊維業は分業体制をとっているため（下記図参照）、勝山市内にも、糸を加工する然糸会社や生地を製造する織物会社、生地を縫い合わせて衣料などを製造する縫製会社などのほか、非衣料分野で活躍する産業繊維メーカー会社など様々な分野の繊維会社が集まっています。（一貫体制をとっている企業もあります）

そして、それぞれの会社で作られる製品は、高品質であり、繊維会社のもつ技術力は世界でも誇れるものであると評されるなど、現在も繊維産地としての魅力が受け継がれています。

しかし、時代とともにその魅力が市内外の方に気づかれにくくなっているなどの課題もあります。



独自ブランドを立ち上げる
(製造から販売まで自社で一貫して展開) = 株式会社力サ川 =



日本新記録を樹立したアスリーートの靴に生地が採用 = 松文産業株式会社 =

次のページでは、繊維産地としての課題をどう乗り越え、繊維産地の魅力を高め、発展させようとしているのかについて、繊維会社の若手経営者の思いをご紹介します。

川の流れにたとえられる
繊維の生産プロセス

繊維産業は、製造・流通段階で分業体制になっており、繊維会社でも取り組む事業は多岐にわたります。

川上
「原料糸の生産」

- 紡績業 製糸業
- ・天然繊維の製造
- ・合成繊維の製造
- ・原料の輸出

川中

「繊維産地」

- 織物製造業 編物製造業
- 染色加工業 縫製業
- ・糸の加工
- ・生地の製造（織物・編物）
- ・精錬・染色
- ・縫製

川下

「アパレル・流通・卸売」

商社 / 百貨店 / 問屋

(参考：はたやブックレット11 近代福井の羽二重精練)